

児童・生徒用社会的責任目標尺度の検討

須崎, 康臣
九州大学大学院人間環境学府

兄井, 彰
福岡教育大学教育学部

杉山, 佳生
九州大学健康科学センター

<https://doi.org/10.15017/27208>

出版情報：健康科学. 35, pp.45-50, 2013-03-29. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

児童・生徒用社会的責任目標尺度の検討

須崎康臣¹⁾, 兄井彰²⁾, 杉山佳生^{3)*}

Reliability and validity of the social responsibility goal scale for elementary school and junior high school children

Yasuo SUSAKI¹⁾, Akira ANII²⁾ and Yoshio SUGIYAMA^{3)*}

Abstract

The purpose of this study was to examine the reliability and validity of the social responsibility goal scale for elementary school and junior high school children. This scale was administered to 485 fourth through sixth graders and 259 seventh through eighth graders. In addition, teachers were asked to rate the strength of the children's responsibility. The results of an exploratory factor analysis indicated that the scale can be divided into two subscales: compliance goals and prosocial goals. Regarding reliability, in fourth through sixth graders, the Cronbach's α of the compliance goals subscale was .80, and that of the prosocial goals subscale was .87; in seventh through eighth graders, the Cronbach's α of the compliance goals subscale was .81, and that of the prosocial goals was .86. In addition, teachers were asked to rate the degree of children's responsibility toward the classroom. Both subscales were positively related to teachers' ratings of children's responsibility. Thus, we concluded that this scale had high reliability and validity.

Key words: social responsibility goal, compliance goals, prosocial goals, validity, reliability.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 35: 45-50, 2013)

1) 九州大学大学院人間環境学府, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University, Kasuga, Japan.

2) 福岡教育大学教育学部, Faculty of Education, Fukuoka University of Education, Akama, Japan.

3) 九州大学健康科学センター, Institute of Health Science, Kyushu University, Kasuga, Japan.

*連絡先: 九州大学健康科学センター 〒816-8580 福岡県春日市春日公園 6-1 Tel&Fax: 092-583-7856

*Corresponding author. Institute of Health Science, Kyushu University, 6-1 Kasuga-koen, Kasuga City, 816-8580, Japan.
Tel. & Fax: +81 92 583 7856. E-mail: sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

はじめに

子どもの学業場面における研究は、学習方略や学習意欲などの観点から行われることが多い。しかし、子どもの学習の多くが、学校の教室で行われ、クラスメイトや教師との相互作用を通して進められる。そのため子どもの学習場面に影響する社会的要因について考慮する必要が指摘されている¹⁾。

子どもの学習場面におけるクラスメイト同士の協力や教師との関係といった社会的要因の一つの側面として、社会的責任目標が挙げられる¹⁾²⁾。この社会的責任目標とは、教室における規範やルールを守り、対人的に円滑な関係を持つようとする目標である³⁾⁴⁾。この社会的責任目標を持つ子どもは、教室場面において責任的な行動をし⁵⁾、規範的、協力的な行動をとるため、クラスメイトや教師から受容される⁵⁾⁶⁾ことが知られている。また、このような良好なクラスメイトや教師との人間関係により、学習意欲が高まり、学業成績にも影響することが確かめられている²⁾⁷⁾。同じく、社会的責任目標を持つ子どもは、教師やクラスメイトへの適応が高く、このことにより学習への適応も高まることが報告されている⁸⁾。

子どもの社会的責任目標を測定する尺度は、中谷²⁾によって小学生を対象としたものが作成されている。この尺度は、向社会的目標と規範遵守目標の2つの下位尺度から構成されている。向社会的目標とは、社会的、対人的な協力や援助を目標とするもので、規範遵守目標とは、教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り、規範に従うことを目標とするものである。この2つの下位目標は、小学生では、女子は男子よりも高く、学年が上がるにつれて、規範遵守目標が低下することが確かめられている⁹⁾。また、この社会的責任目標尺度を用いて、調査が数多く行われており、小グループ学習活動における学習中の有効な相互作用と関連があること¹⁰⁾、学級適応や理科学習への興味・関心、動機づけと正の関連があること¹¹⁾が明らかにされている。さらに、出口ら⁸⁾は、社会的責任目標が学級適応や学習動機に関する仮説プロセスの検証している。その他、関¹²⁾は社会的責任目標における日中比較を行っている。

このように子どもの社会的責任目標に関する研究が

数多く行われている。しかしながら、校種を含めた学年差や性差に関する研究は少ない。中谷⁹⁾は小学生の学年差及び性差を検討しているが、中学生における社会的責任目標の学年差及び性差については検討されていない。また、中谷ら¹¹⁾は、中谷²⁾の社会的責任目標を簡易化した尺度を用いて、小学5年と中学2年の学年差を検討している。しかし、他の校種差や学年差については検討されていない。特に、小学校と中学校では、学級担任制から教科担任制に変わるなど学校生活が質的に大きく変化し、校種の違いの影響は大きい¹³⁾と考えられる。また、内藤ら¹⁴⁾によると、女子の方が男子よりも中学校への環境移行に関して影響を受けやすいことが報告されている。このことから、社会的責任目標においても校種の影響は大きく、その影響は男子より女子の方が大きいと考えられる。そこで、本研究では社会的責任目標の校種を含めた学年差及び性差の検討を行うこととする。

ところで、調査研究において心理尺度を使用する場合、その尺度が本当に測定したい概念を測定できているかということを考慮する必要がある。つまり、妥当性の高い尺度を使用しているかどうかを考慮する必要がある。一般的に、尺度の妥当性を検討するため、他尺度との相関を算出する方法で行われている。この方法に関して、村上¹⁵⁾は、他尺度からの相関のみを用いて妥当性を検討するだけでは不十分で、他者評定や学力といった客観的数値としての外部基準を用いて相関を算出することを推奨している。本研究で使用される社会的責任目標尺度は、中谷⁹⁾によって教師評定という外部基準との相関で妥当性が検討されている。しかし、この尺度の妥当性は小学生のみで検討されており、中学生については検討されていない。そこで、本研究では、小学生及び中学生を対象とした社会的責任目標尺度における信頼性及び妥当性の検討した上で、小学生及び中学生の社会的責任目標における学年差及び性差について検討を行うことを目的とする。

方法

1. 対象

小学4年154名(男子62名,女子92名),小学5年157名(男子76名,女子81名),小学6年174名(男

子 91 名, 女子 83 名), 中学 1 年 125 名 (男子 62 名, 女子 63 名), 中学 2 年 134 名 (男子 67 名, 女子 67 名) であった。

2. 調査の実施時期

調査の実施は, 2012 年 1 月下旬に行われた。

3. 調査の手続

社会的責任目標の調査は各クラスに, 担任教師により授業時間を利用して集団形式で行われた。また, 子どもの社会的責任目標に対する教師評定については, 担任教師に依頼した。調査の実施は, 2012 年 1 月下旬に行われた。

4. 質問紙

(1) 社会的責任目標尺度

中谷²⁾で作成された全 18 項目が用いられた。この尺度は, 向社会的目標と規範遵守目標の 2 つの下位尺度から構成されている。向社会的目標とは, 社会的, 対人的な協力や援助を目標とするものである。また, 規範遵守目標とは, 教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り, 規範に従うことを目標とするものである。尺度の項目数は, 向社会的目標 10 項目, 規範遵守目標 8 項目であった。回答方法は, 「いつもあてはまる」から「どんなときにもあてはまらない」までの 5 段階の評定で求めた。

(2) 児童・生徒の社会的責任目標に対する教師標定

「教室における明示的あるいは暗黙のルールを守り, 規範に従おうとする感覚を持っている子どもですか」という質問に対して, 担任教師は学級内の子ども全員を「あてはまる」から「あてはまらない」の 5 段階の評定を求めた。

結果と考察

小学生と中学生における社会的責任目標尺度の構造を検討するため, 因子分析を行った。主因子法を行った結果, 固有値は 6.54, 1.80, 1.31, 0.95...と推移し, 因子の解釈可能性から, 2 因子と判断することが妥当と判断した。そこで, 因子負荷量が.35 以上を基準として, プロマックス回転による因子分析を行った。また, 同項目で.35 以上の負荷量を示す項目に関しては削除

を行った。その結果, 2 因子が抽出され, 抽出された因子の命名を行った。因子 I は, 友人やクラスに対しての協力や援助をしようとする項目から構成されることから「向社会的目標」因子と命名した。因子 II は, 授業中におけるルールを守るといった項目から構成されていることから「規範遵守目標」因子と命名した (表 1)。

「向社会的目標」因子を構成する項目の中には, 「クラスで自分が受け持ったことは, きちんとするようにします」が含まれていた。この項目は, 中谷²⁾では, 規範遵守目標を構成していた項目であった。今回の調査対象においては, クラスで自分が受け持ったことをきちん行うということを, クラスといったクラスメイトと共有する環境において協力することとして捉えていたために, この項目が「向社会的目標」因子に含まれていたと考えられる。

また, 「授業で先生にやるように言われたことは, めんどくでもきちんとするようにします」が両因子の負荷量が.35 以上あり, 分析から除外した。この項目は, 先生という対人的な協力を行うといった向社会的目標の意味と, 教室におけるルールを守るといった規範遵守目標の意味を含んでいたため, 両因子から高い負荷量を示していたと考えられる。

次に, 尺度の信頼性の検討のために Cronbach の α 係数を算出した。小学生において, 向社会的目標では.87, 規範遵守目標では.80 であった。また, 中学生において, 向社会的目標では.86, 規範遵守目標では.81 であった。このことから, 小学生及び中学生において, 尺度の信頼性が高いと考えられる (表 2)。

さらに, 妥当性の検討を行うために, 各下位尺度得点と教師評定との相関を算出した。小学生において, 向社会的目標では.36 ($p < .01$), 規範遵守目標では.46 ($p < .01$) であった。また, 中学生において, 向社会的目標では.24 ($p < .01$), 規範遵守目標では.44 ($p < .01$) であった (表 3)。いずれも, 小学生と中学生ともに教師評定との相関が有意であり, 特に, 向社会的目標に比べて規範遵守目標が, 教師評定との間に強い関係をもっていることが示された。このことから, 小学生及び中学生の社会的責任目標を測定する尺度として妥当性が高いと考えられる。

表 1. 社会的責任目標尺度の因子分析結果

	因子 I	因子 II
向社会的目標		
勉強のわからない人には、教えてあげようと思います。	.785	-.121
自分が前に解いたことがある問題がわからない友達がいたら、その問題を解く手助けをしてあげようと思います。	.783	-.109
えんぴつや消しゴムを忘れた人には、自分のものを貸してあげようと思います。	.674	-.093
教科書を忘れた人がいたら、自分のものを見せてあげようと思います。	.668	-.052
友達が困っていたら、手助けしようと思います。	.647	.095
がっかりしている人がいたら、なぐさめたり、はげましたりしてあげようと思います。	.633	.015
友達から何かをたのまれたら、それをやっけてあげようと思います。	.596	.053
けがをしたり、具合が悪い人がいたら、保健室に連れていこうと思います。	.550	.134
クラスで自分が受け持ったことは、きちんとするようにします。	.485	.253
規範遵守目標		
友達としゃべりたくなったり、授業中はがまんするようにします。	-.157	.807
授業中につかれてきても、授業の終わりまで先生の話をよく聞くようにします。	.066	.646
授業中は、他の人のじゃまにならないようにします。	.041	.626
学校のきまりは、少しくらいなら守らなくてよいと思います。	.082	-.507
自習時間ならば、友達とおしゃべりしてもいいと思います。	.058	-.483
人の悪口を言わないように気をつけます。	.215	.379
めんどろだと思っても、当番の仕事があるときには、それをきちんとやるようにします。	.311	.374
宿題をやらずに学校に行くことがあってもよいと思います。	-.049	-.358

因子間相関 因子 I .595

表 2. 社会的責任目標尺度の信頼性

	向社会的目標	規範遵守目標
小学生	.87	.80
中学生	.86	.81

表 3. 社会的責任目標尺度と教師評定の相関

	向社会的目標	規範遵守目標
小学生	.36	.46
中学生	.24	.44

すべて1%水準で有意

表 4. 社会的責任目標の学年差及び性差に関する分散分析

	小学生						中学生				主効果		交互作用
	4年生		5年生		6年生		1年生		2年生		学年	性	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子					
向社会的責任目標	30.8 (6.4)	38.0 (4.9)	34.8 (6.8)	38.1 (5.1)	35.3 (6.4)	39.1 (4.1)	30.9 (6.7)	36.1 (5.5)	35.0 (5.5)	35.7 (4.6)	10.637 **	94.714 **	6.501 **
規範遵守目標	28.0 (5.2)	32.6 (5.1)	29.5 (5.1)	32.5 (4.7)	29.5 (5.4)	33.2 (5.0)	27.3 (6.2)	30.0 (4.7)	29.3 (4.9)	29.9 (4.7)	6.488 **	59.690 **	2.911 *

**p<.01,*p<.05

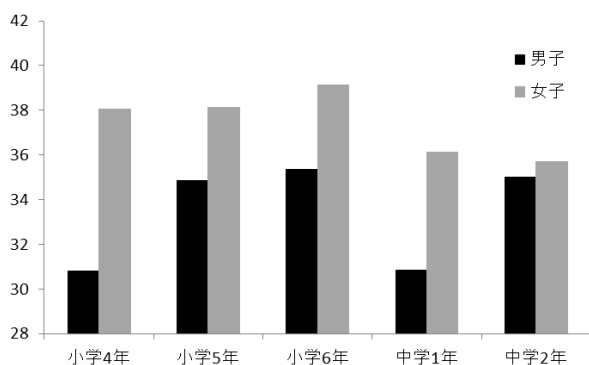


図 1. 向社会的目標における学年差及び性差

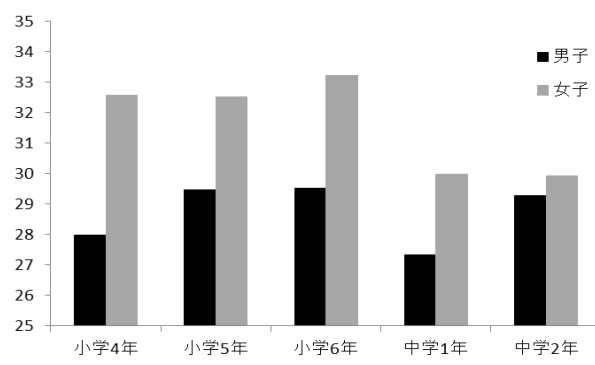


図 2. 規範遵守目標における学年差及び性差

社会的責任目標尺度の学年差と性差を検討するために、学年（小学4年・小学5年・小学6年・中学1年・中学2年）×性（男子・女子）の2要因分散分析を行った。その結果、向社会的目標得点と規範遵守目標得点ともに交互作用が有意であった（表4）。向社会的目標得点と規範遵守目標得点ともに、中学2年を除いて、他のすべての学年において、女子の方が男子より得点が有意に高かった。このことから、中学2年を除く、

他のすべての学年において、女子は男子より社会的責任目標が高いことが考えられる。中谷⁹⁾の研究においても、小学生の向社会的目標と規範遵守目標において、女子の得点が男子より高いことを明らかにしている。また、白井・橘川¹⁰⁾は中学生の規範意識について、女子の規範意識が男子より高いことを報告している。さらに、小学校高学年の時期では、道徳性など他の社会性の点でも、男子よりも女子の発達の程度がより進ん

でいることが示唆されており¹⁷⁾¹⁸⁾、このような発達の傾向の違いが今回の結果にも見られた。

次に、向社会的目標得点における男子について、小学4年と中学1年は小学5年、小学6年と中学2年より得点が有意に低かった。女子においては、小学6年は中学1年と中学2年より得点が有意に高かった。規範遵守目標得点における女子について、中学1年と中学2年は小学4年、小学5年と小学6年より得点があり低かった。男子においては、有意な差は確かめられなかった。このことから、向社会的目標は、男子において小学4年と中学1年は他の学年に比べて低いことが確かめられた。また、女子において、小学6年と中学1・2年より高いことが確かめられた。規範遵守目標は女子においてのみ、中学生(1年・2年)は小学生(4年・5年・6年)より低いことが確かめられた。つまり、向社会的目標は男子及び女子ともに小学校から中学校といった校種の違いで異なることが確かめられた。また、規範遵守目標は、女子だけが校種の変化で低下していることが確かめられた。廣岡・横矢¹⁹⁾においても、児童・生徒の規範意識は学年が上がるにつれて、低下していることを示している。また、中谷⁹⁾は児童における規範遵守目標が、高学年になるほど低下することを報告している。このような学年差、特に、校種における違いをもたらす要因として、小学校と中学校の環境の変化¹³⁾が考えられる。例えば、小学校では、学級担任制であるが、中学校になると教科担任制となる。そのため、小学校では担任教師におけるクラス内のルールが一貫して指導されるが、中学校では、担任教師に限らず、各教科担当の教師がクラスに関わるため、クラス内のルールが統一されにくいと考えられる。そのため子どもの社会的責任目標が低下することが考えられる。さらに、内藤ら¹⁴⁾がこの環境移行は男子よりも女子が影響を受けやすいと報告しており、規範遵守目標において、女子のみに小学生(小学4年・小学5年・小学6年)と中学生(中学1年・中学2年)の差が確かめられたことは、小学校から中学校の移行の影響を受けていることが考えられる。

以上のことから、信頼性及び妥当性を有する社会的責任目標尺度が確認され、小学生と中学生における学年及び性の社会的責任目標の違いが確かめられた。今

後は、この社会的責任目標に影響を及ぼす要因を明らかにし、適切に社会的責任目標を高めるための方策を検討する必要があると考えられる。

まとめ

本研究の目的は、小学生及び中学生における社会的責任目標の信頼性、妥当性、学年差及び性差の検討を行うことであった。その結果は、以下のとおりである。

- 1) 小学生及び中学生における社会的責任目標尺度は先行研究と同様に2因子構造であった。また、信頼度係数も高く、信頼性が確かめられた。さらに、教師評定との相関も有意であり、妥当性が確かめられた。
- 2) 向社会的目標については、中学2年を除いて女子が男子より高いことが認められ、小学校から中学校にかけて低下することが示された。
- 3) 規範遵守目標については、中学2年を除いて女子が男子より高いことが認められ、女子において小学校から中学校にかけて低下することが示された。

参考文献

- 1) 中谷素之 (2001): 社会的動機づけの発達と学業達成過程—社会的責任目標研究に関するレビュー—。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達学, 48: 217-232.
- 2) 中谷素之 (1996): 児童の社会的責任目標が学業達成に影響を及ぼすプロセス。教育心理学研究, 44: 389-399.
- 3) Wentzel KR (1991): Relations between social competence and academic achievement in early adolescence. *Child Development*, 62: 1066-1078.
- 4) Wentzel KR (1993): Motivation and achievement in early adolescence. The role of multiple classroom goals. *Journal of Early Adolescence*, 13: 4-20.
- 5) Wentzel KR (1994): Relations of social goal pursuit to social acceptance, classroom behavior, and perceived social support. *Journal of Educational Psychology*, 86: 173-182.
- 6) Brophy JE, Everton CM (1978): Context variables in teaching. *Educational*, 12: 310-316.

- 7) 中谷素之 (2002): 児童の社会的責任目標と友人関係, 学業達成の関連—対人関係を媒介とした動機づけプロセスの検討. 性格心理学研究, 10: 110-111.
- 8) 出口拓彦, 中谷素之, 遠山孝司, 杉江修治 (2006): 児童・生徒の社会的責任目標と学級適応感・学習動機の関連. パーソナリティ研究, 15: 48-51.
- 9) 中谷素之 (1997): 児童用社会的責任目標尺度の信頼性・妥当性の検討. 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 44: 221-227.
- 10) 出口拓彦, 中谷素之 (2000): グループ学習中の相互作用に及ぼす教師の介在および児童の社会的責任目標の影響. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達学, 47: 69-88.
- 11) 中谷素之, 遠山孝司, 出口拓彦 (2002): 社会的責任目標と理科学習への興味・関心と動機づけ, 認知的共感性, および学級適応との関連—学年差に注目した検討—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達学, 49: 277-287.
- 12) 関麗 (2010): 学業場面における達成目標志向性と家庭・学校・地域での社会的責任目標との関係について—中国と日本の中学生を対象として—. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 13: 13-20.
- 13) 荒木紀幸 (2007): 自尊感情. 荒木紀幸 (編集) 教育心理学の最先端-自尊感情の育成と学校生活の充実-. あいり出版, pp.155-176.
- 14) 内藤勇次, 浅川潔司, 小泉令三, 米澤孝男 (1985): 児童の新環境移行に関する研究. 兵庫教育大学紀要, 5: 81-90.
- 15) 村上宣寛 (2006) 心理尺度のつくり方. 北大路書房, pp.51-62.
- 16) 臼井茉莉, 橘川真彦 (2007): 中学生における規範意識とそれに影響を及ぼす要因. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 30: 165-173.
- 17) アイゼンバーグ N とマッセン PH (菊池章夫ほか訳) (1991): 思いやり行動の発達心理. 金子書房. pp.79-80. (Eisenberg N, Mussen PH (1989): The roots of prosocial behavior in children. Cambridge University Press.)
- 18) 内藤俊史 (1991): 道徳的行動発達. 大西文行 (編集) 新児童心理学講座 9-道徳性と規範式の発達-. 金子書房, pp.95-138.
- 19) 廣岡秀一, 横矢祥代 (2006): 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析. 三重大学教育学部研究紀要自然科学・人文科学・社会科学・教育科学, 57: 111-120.